日本語の表記形態における主観的表記頻度
ーー高校１年生の場合ーー

関西学院大学文学部　　賀集　寛
神戸山手女子短期大学　井上 道雄

【はじめに】

浮田ら(1993)・賀集(1994)は，日本語の漢字・ひらがな・カタカナ各表記の主観的表記頻度について，日常語 750 語について男女大学生を被験者として評定実験をおかない標準的資料を得ている．そして，得られた資料について種々の観点から検討を加えているが，評定者の年齢の問題があげられた．そのひとつに表記の主観的表記頻度についての判断は，世代や教育内容の違いを背景に年齢によって異なることが予想された．

賀集ら(1994)は，中高年を対象に浮田ら(1991)と同じ日常物品名 119 語(750 語の一部)を用いて，ほぼ同じ手続にしたがって，日本語の３表記の主観的表記頻度の評定実験をおこなった．その結果，中高年は，大学生よりも漢字表記の評定率が高くひらがな・カタカナ表記の比率が低かった．従って，中高年の漢字優位の傾向を示し，世代差を反映したものと解釈された．

本実験では，この世代間の年齢差をさらに検討するため，高校１年生を対象に同一の実験手続を用いて評定実験を行なった．

【方法】

(1)材料：漢字，ひらがな，カタカナのいずれでも表記可能な動植物を除く日常物品名 119 語．

(2)被験者：高校１年生 42 名．平均年齢 15.6 才(15－18 才)ですべて女子である．

(3)手続：実験は，高等学校の教室で集団でおこなった．被験者に，各単語を３つの表記で示した評定用紙の小冊子(9 頁)を配布した．各表記の下のカッコ内に，

日頃の生活のなかで
　よく見る・・・・・・・・・○
　見ることもある・・・・・・△
　まず見ることはない・・・・×

という基準にしたがって，いずれかの記号を記入するよう求めた．評定冊子の作成にあたっては，前回と同様に項目の配列および３表記の配列順序についてカウンターバランスした．

【結果および考察】

よく見る(○)と評定した被験者の比率のみについて分析し，大学生(浮田ら,1991)および中高年(賀集,1994)のデータと比較検討した．特に，高校生に焦点をあててみていく．

全項目についての３表記に対する主観的表記頻度(表記型)

表１は，表記型による３世代の主観的表記頻度の平均を示したものである．漢字表記では，中高年が 46 でもっとも高く，高校生では 6 と急減している．ひらがな表記は，高校・大学生で中高年に比べて高くなっている．また，高校生は，ひらがな優位型・漢字ひらがな型さらに並立型で高い表記頻度を示した．つまり，ひらがな表記の評定率が全体に高いと言えるだろう．従って，高校生では，漢字表記のみではなく，漢字・ひらがなの多様な表記で目にすることを示している．

表１　３世代の主観的表記頻度(語数)

	高校生	大学生	中高年
漢字型	6	31	46
ひらがな型	21	22	8
カタカナ型	1	1	0
漢字優位	23	20	22
ひらがな優位	11	10	4
カタカナ優位	1	5	0
漢字ひらがな型	31	10	0
漢字カタカナ型	0	2	0
ひらがなカタカナ型	6	2	0
並立型	14	9	6
分類不可	5	7	33
	119	119	119

３表記の高主観的表記頻度

表２は，三つの表記形態において，主観的表記頻度が 70%を越える項目数を示したものである．いわば，日常的にはほとんどその表記で目にするといえる語である．漢字表記は，各世代ともほぼ同じ(69-70 語)で

表２　70%を越える主観的表記頻度（語数）

表記型	高校生	大学生	中高年
漢字	69	70	69
ひらがな	78	50	13
カタカナ	16	15	2

あるが，カタカナ表記では高校・大学生が多く，ひらがな表記では，高校生が 78 語ともっとも多くなっている．漢字表記されている語の評定はいずれの世代でも一定であるが，高校・大学生とより若い世代になるにしたがって，ひらがな表記の評定が高くなる．先の表記型における，ひらがな表記の高さと考えあわせると，高校生では，漢字表記に加えてひらがなで表記されている語が多いことを示唆している．

表記型の変動

高校生と大学生の表記型の変動を表したのが，表3である．例えば，大学生の漢字型 31 は，高校生では漢字型 6･漢字優位型 16･漢字ひらがな型 7･分類不能型 2 である．この分析からも，高校生が，大学生と比較して漢字型が漢字優位や漢字ひらがな型に，漢字優位型が漢字ひらがな型へ移行していることを示している．

以上の結果から，高校生の主観的表記頻度は，漢字表記で見る漢字の比率は他の世代とほぼ同じであるが，それに加えてひらがな表記で見る比率が高いことが明らかとなった．年齢的に近い大学生と比べて，ひらがな表記への傾向の強さを示したことは，特に興味をひく点である．このことは，賀集ら(1994)の年齢とともに漢字優位の傾向が強くなることを，高校生の世代においてもさらに示唆したものと言える．だたし，漢字で安定して表記される語は，世代間を通じてあまり変わらない結果であった．

表３ 高校生と大学生間における表記型の変動

		高校生										
		漢	ひ	カ	漢優	ひ優	カ優	漢ひ	漢カ	ひカ	並立	分不
大学生	漢字型	6			16			7				2
	ひらがな型		17								1	
	カタカナ型						1					
	漢字優位	1			6			13			1	
	ひらがな優位		2			5		2		1		
	カタカナ優位			1						3	1	
	漢字ひらがな型				2	1		8			1	
	漢字カタカナ型										2	
	ひらがなカタカナ型									2		
	並立型										9	
	分類不可		2		1	1		1				3